主な記事
○…アグリビジネス創出フェア開催…（1面）
○…ウシのゲップを昆布で削減…（3面）
○…ホメオパシー学術大会…（4、5面）
○…アグリビジネスの目玉…（8面）

THE ENVIRONMENT & AGRICULTURE NEWS
環境農業新聞
メール：ecoagri-na@sweet.ocn.ne.jp

2022年（令和4年）
10月15日（土）
第248号
毎月15日発行
平成13年4月17日
第三種郵便物認可

発行所　環境農業新聞社
編集発行人　成瀬一夫
東京都葛飾区東金町1-41-9
〒125-0041　フランス堂ビル3階
電話　03-3826-5212
FAX　03-3826-5217
年間購読料　3,000円（税・送料込）
郵便振替口座　00150-2-290578

盛り沢山のアグリビジネス創出フェア

課題は山積み"技術"に救いを

基調講演、セミナーに注目

民間の研究開発を展示にも

能村農相

農林水産省主催のアグリビジネス創出フェア2022が10月26日から28日までの3日間、東京ビックサイトで開催される。今年のテーマは「産学官連携イノベーション～スタートアップ創出元年～」。このフェアは、全国の産学官の機関が有する、農林水産・食品分野などの最新の研究成果を展示やプレゼンテーションなどで分かりやすく紹介し、研究機関同士や研究機関と事業者との連携を促す場として開催する「技術・交流展示会」である。我が国の農林水産業を取り巻く環境は著しく厳しい状況にあり、活路を見出すためには技術開発によるところが大きい。有意義なフェアと好評を博しているイベントである。

今年のテーマは「産官学連携イノベーション～スタートアップ創出元年～」。それに相応しいものになるではと期待も大きい。

基調講演も東京大学の石井菜穂子教授（理事・未来ビジョン研究センター）が「持続可能な食料システムへの転換と日本の役割」と題してメインステージで26日午前11時45分から約1時間講演することになっている。さらに午後1時からマッキンゼー・アンド・カンパニー アソシエパートナー 川西剛史農学博士が「農業を取り巻くグローバルトレンドとアグリビジネスの未来」と題して基調講演をすることになっている。

前回、元気農業開発機構の小間で金子農相（当時）と語たるトーワの森永社長

また、メインステージでは「SIPスマートバイオ産業・農業基盤技術、ムーンショット型農林水産研究開発事業セミナー」などが3日間行われる。さらに出展者によるプレゼンテーションはセミナールームA、セミナールームB、セミナールームCにおいて断続的に行われる。

出展者は、「みどりの食料システム戦略ゾーン」「農業ゾーン」「林業ゾーン」「水産ゾーン」畜産ゾーン」「食品ゾーン」「総合ゾーン」にそれぞれ出展する。

NPO法人元氣農業開発機構（古瀬洋一郎理事長）は農－36にオーガニック・自然農を推進している日本豊受自然農が独自開発した「恩古菌」を始め、独自で開発した加工品、活動内容を紹介。

また、鹿児島県知覧市において行っている「さつまいも基腐れ病対策の実証試験をしている。フルボ酸を使って行っているが、その成果を発表。さらに消臭、殺菌に使われている次亜塩素酸水を生成装置使わず、粉を水道水で攪拌するだけで生成できると言う画期的な開発商品を展示することになっている。

また、一般社団法人農林水産環境技術センター（成瀬一夫理事長）は総－16に神奈川県横浜で昆布の養殖を行っているNPO法人アジア環境整備機構として昨年金沢漁連様と協定を結び、小笠原伸一氏、佐藤都世子氏、富本龍徳氏が里海イニシアティブを辞めて各個人の得意分野を生かし弊社のブルーカーボン昆布事業に全力投球をしているが「牛に昆布を食べさせ牛のゲップを削減させ、肉質も、生乳もアップさせることが出来るのではなかろうかと研究開発に取り組みたいと出展してコーディネーターのアドバイスを得たいとしている。

さらに物流革命を起こそうとエンジンが無い船の研究開発をしている加森紀良さんが出展する。エンジンがないのにどうやって船が動くのか。まさか昔、船底で人間が漕いでいたが、それを現代風にしたのかという興味深い技術を展示する。

食料危機、エネルギー危機など危機が沢山ある中で、一番大切なことは食料の確保。色々なものが高騰しており、農林水産業に携わる人々の所得向上ではなかろうか。若い人たちが所得が安定している仕事に就きたいと願っている筈だ。新規就農者に聞けば一番困っていることは、折角育てたものを盗まれることだと言う。鳥獣被害より人間の盗人被害が大きな社会問題になるのではなかろうか。高圧の電流を流して人間を懲らしめてやった方がいいという過激なことを言う女性もいる。

今回のアグリビジネス創出フェアで多くの課題を解決する研究開発があるのか注視していきたい。

川合豊彦局長

総指揮をとる 川合豊彦局長
熱血漢でフットワーク抜群

○…10月26日から3日間、東京ビックサイトで開催される農林水産省主催のアグリビジネス創出フェア総指揮をとるのは、大臣官房技術総括審議官兼農林水産技術会議事務局長の川合豊彦氏である。川合氏はいわゆる改革派の一人である。現場を重視し、関係部局の仕事を知る必要があるとし技術会議事務局の職員を色々な部署に兼任で就かせたりした。事務官、技官からの信頼も厚くOBからもフットワークがいいと高評価を得ている。

○…県に出向し現場をよく歩いたようで、本省に戻っても応援する姿を見せていた。今までの局長とひと味違う面も持ち合わせている。兎に角、明るく元気がある。 みどりの食料システム戦略に関わった人物でもある。

○…最近、農研機構の体制について色々良くない話が飛び交っているが、メスをいれるのかも注目だ。○…名大院卒。1989年入省。生産局総務課長、技術会議事務局長研究総務官、大臣官房審議官を経て大臣官房技術総括審議官兼農林水産技術会議事務局長に2022年（令和4年）6月27日に就任。57歳。大分県竹田市出身。座右の銘は「先手必勝、ミッション遂行」。

由井代表、27日プレゼン
ESIの菊地社長は27日午後

前回のトーワのプレゼン

坂の上零さんのプレゼン

アグリビジネス創出フェアでは26日から28日までセミナールームで農研機構、大学などの研究機関等による研究内容がプレゼンテーションを行うことになっている。民間ではNPO法人元氣農業開発機構は27日午前10時40分から「独自開発の『豊受御古菌』活用での耕作放棄地再生とオーガニック農業推進」と言うテーマで日本豊受自然農の由井寅子代表がセミナールームAにおいてプレゼンテーションを行うことになっている。

また、同日午後2時40分から一般社団法人農林水産環境技術センターが「だれでも簡単に次亜塩素酸水できる研究開発」を北海道札幌市のESI株式会社の菊池匡彦社長が開発、商品化についてセミナールームAにおいてプレゼンテーションを行うことになっている。

日本豊受自然農は。食料危機を視野に耕作放棄地の復活を静岡県伊豆の国市の支援を受け、耕作放棄地を蘇生させている。その際に独自に研究開発した「豊受御古菌」を使用している。

この御古菌は、秋田県、京都府などで使われ、驚くような成果を上げている。